



EVIL DEAD

CAN THEY BE STOPPED?

これが問題のスプラッタ・ムービー!

ない。現在イギリスで、こうしたスプラッシュ・ムービーのビデオ化商品に關しても、検閲が必要なのではないかという問題が起こっている。性表現よりも暴力や残虐表現に規制の厳しい欧米だが、そのきつかけなどした札付き映画が、この「死霊のはらわた」である。汚らわしい映画ビデオの一本として、「地獄の謝肉祭」や「悪魔の沼

A red pickup truck is parked in a field. In the foreground, there is a large, fluffy chick, possibly a turkey or a large chicken, with its head turned towards the camera. The background shows a line of trees and a clear sky.

死霊のはらわた

EVIL DEAD〈カラー作品〉アメリカ映画

A group of four people, two women and two men, are standing in a wooded area. They are positioned in front of a yellow car. The person on the far left is a woman wearing a dark jacket and a patterned skirt. Next to her is another woman in a grey sweater and dark pants. To her right is a man in a dark jacket and dark pants. On the far right is a man in a dark jacket and dark pants, holding a long stick or pole. The background shows trees and a yellow car.

二 一) の映画は「コワイ」である。
 かくはそもそもホラー映画というのは余り好きではない。当然、熱心な観客ではない。だいたい、十三日の金曜日「シリヤーズ」など、全部観たはずなのだが、より「ART」や「2」や「わらわらわらわら」より、「サベリア」「スベリア2」の方が先に撮られた作品だとか、日本公認の「ブギーマン」とは、「ハロウィン2」のことであり、それとは別に「ブギーマン」という映画がアメリカにはあるとか。ホラーマニアに言われても「へえそうですか」ともんで、いたって健康な精神の持ち主なのである。
 しかし、この映画は「コワイ」のである。
 その発端は、とりたててホラー映画というわけでもない(ごくほどの紳士ではないが)周囲から一応は常識的な人と思われているA氏が、勧められるがままにこの「死霊のわらわら」の輸入ビデオを観て以来、今日に到るまで、27回も繰りかえし、しかも頭からケツまで観通してしまつたという恐るべき事実である。その上、某ビック

目をやめて、そのういへは「エド・レッド(原題)」というの
は最高ですわね」と言い、滅多に映画を誉めないのが知
られる、日本一の特殊メイク・アーティストの原口氏までが
手放して誉めきつたのである。

恐るべき前兆の余波をひきずりながら、私はこの映画
を観た。

冒頭、ステイディカムで営めるように写し出される沼
面。あー、どこかで観たな、「悪魔の沼」がある。「スワク
ム」かな、まさか「シャイニング」ではあるまいな、な
んぞと思っていると、いきなりシンク曲げのユリ・ゲ
ラーを清くならぬ男のアップがドーンと出る。車
の中だ。おい冗談じゃないやないぞ、バターンだぜ。これじゃ
ループの避暑のドライブ旅行。バターンだぜ。これじゃ
「悪魔のいけいえ」や「サラン・ドラン」と同じじゃねーか。
「不安な心持ちでいると、全くそのまーんのまーん。一
つの狂いもなくて、ドライブ旅行団は、誰も使わなくなっ
た貸別荘」へと辿りついたのである。これは全くもって予
想だにしない事態である。いくらなんでも、こゝまでは余
り「十三日の金曜日」のままだというは、余りにもいへは余
りに悲しいのではないの。まあいいや、つまんなかった
ら寝ちまおう。などと、こっちは気を抜くや否や、サ
ム・ラム監督の一人時間攻撃が開始されるのである。

そのドライブ感覚は「悪魔のいけいえ」の如く、そのテ
クニクは「シベル館」の「恐怖の館」の如く、そのキ
ツキは「地獄の謝肉祭」の如く、A・ロメロはりの安
定した演出で、ある時はコクトオの「オルフェ」のよう
に、ある時はオリビエの「オセロ」のように、またある
時は「吸血鬼コゲミドロ」のように観客を打ちのめす
の攻撃に、こちらがグロッキーになったと知ってか知ら

まずい雲田氣の時にへらへら笑いつつお暇できればいいんだけど、てやんでえ矢でも鉄砲でも持ってきやがれいなんてつい言ってしまうがちだから、話は悪い方向へと向かう。

[illegible]

「トビ」のラストを用意していたら、まさかこのサム・ライミという男、どえらい奴である。聞いてたことによると、ぼくと同じ一九六一年生まれと言っているではないか。しかもデトロイトとかこの大大学で、真面目にシエラ映画を研究して居たらしい。なるほど、目録人の役者を使いながらも、芝居のツボをはずさせない演出の手堅さはそのへんから来ているのだな。数あるなかの欧米の若手監督の中でも、この演出の手堅さと計算の正確さには群を抜いている。前半わさりと既成のパターンを踏襲し、後半それをまさに、血で塗りかえていく構成をもよく練りだしている。

そして特筆すべきは全編を通しての「明るさ」である。これほどネアカなホラー・ムービーはかつて存在しなかった。岸田森のドラキュマもかくやというゾンビたちの元氣あふまぬだらなく嬉しくなる。こんなに血まみれで、こんなにショッキングで、こんなにグチャグチャで、見終わって明るい気持ちになれるものに減点があるもんじゃやない。だからこの映画は、本当にコワイのである。

スビルバーグの「恐怖の館」の原題は「SOMETHING IS EVIL IN THE HOUSE」であり、この「死霊のはらわた」の原題は「EVIL DEAD」である。「死霊のも一つ、拙作の「アゲ鬼神の怒り」の英語題は「FURY OF THE DEAD」と言うのである。しかもこの3作はいずれも作者が21〜23歳の間に撮られている。この恐るべきも致（決して故意ではない）が何をものたらすかは、乞うご期待というところですね。へへへ

というわけで、「死霊のはらわた」は、健全なあなたに、吐き気がするほどの楽しい「コワイ映画なのである。

この作品のプロデューサー、ロバート・G・タベート、監督のサム・ライミ、そして主演兼プロデューサー補のブレンダン・キャンベルの3人は主としてロイドにあるミシガン州立大学の映画研究会(MUSC)出身で、三人協同制作で8ミリ、16ミリを中心にした多くの作品を取り続けてきたチームである。中心は、この「死霊のほわわ」も、最初はブルース・キャンベルがゾンビになって友だちを喰ひまくるという設定で作られた8ミリのオリジナル、WITH IN THE WOODS、があり、それがデトロイトを中心とした自主上映館で上映され大好評だったばかりか、数ドルももの収益をあげた為、それでは35ミリでということだ。たゞ女優エレン・サントワイスをゾンビにして作られた、ということ逸話がある。

「ゾンビ」で知られるホラー映画の巨匠ジョージ・A・ロイドがデトロイトの映画館で非難してビツツバゲを動かさないように、彼らもデトロイトを愛し守り続けているあたり、大物の片鱗がうかがえるのでは？

監督サム・ライミは若く23歳の美青年！




▲左より製作のR・G・タベート、中央がライミ監督、右が製作・主演のB・キャンベル



特殊メイクのトム・サリバンは、遂にT・サビーニ、R・ボーターンを超えた。
凄いいテクニシャン!

ファンゴリア誌の選ぶ1983年度ベストメイクアップアーティスト、ベストテンに「ゾンビ」13日の金曜日、そして知られるトム・サリバンも抜いて堂々第3位に入賞しているトム・サリバンもやはりミシガン大学時代、友達とは別のグループで活躍し「CRY OF CHUDNUT」という幻の名作を残している。彼は、ラスト間近のクライマックス、死霊が一瞬のうちに2千の歳月が戻ったため老いて朽ちていくシーンでは、ダブル・フレーム・アメイジション」という方法を考案し、そのこまどり風の動きで一瞬の時の流れをあらわすことに成功している。



1983年度ベストテンを総なめにしたスプラッタ・ムービーの決定版、遂に日本上陸！

全米映画ファン、特にホラー映画ファンの間で愛読されているホラー・ムービー・マガジン「エンゴリア」では、毎年その年の恐怖映画ベストテンを選出するものだが、ホラー映画、特にスプラッターの部類に属するものには、地方の小さな映画館や自主上映館等で上映されるものが多い。またそういった作品の中にこそキラリと光るマニアックな絶品が隠れている。わざわざベストと称する一般公開映画と小規模公開映画部門とに分けているのは、この「死霊のはらわた」は何と小規模部門のベスト・ムービーでありながら一般部門での「クリスティーン」や「イコ2」といったマイジャーな作品を押えて堂々両部門第1位という驚異のワイルドカードをやっているところである。更に、特殊メイクのトム・サリバンが受賞しているのは前に記したが、監督のサム・ライマンも最優秀監督部門でジョージ・ミラーを抜いてジョン・カーペンターに奪取第3位という荒技を披露しているのである。

更に、ホラー映画ファンの間で権威ある存在とされる国際SFFファンタスティック映画祭で審査員特別賞と観客賞の二つを受賞している。

[illegible]



死霊のはらわた

〈スタッフ/STAFF〉

製作/ロバート・G・タペート…………… Produced by ROBERT G TAPERT
監督/サム・ライミ…………… Directed by SAM RAIMI
脚本/サム・ライミ…………… Written by SAM RAIMI
特殊メイク/トム・サリバン …… Creator of Special Make-up Effects/TOM SULLIVAN
撮影/ティム・フィロ…………… Photography and Lighting/TIM PHILO

〈キャスト/CAST〉

アッシュ/ブルース・キャンベル…………… Ash/BRUCE CAMPBELL
シェリル/エレン・サントワイズ…………… Cheryl/ELLEN SANDWEISS
リンダ/ベッツィー・ベイカー…………… Linda/BETSY BAKER
スコット/ハル・デルリック…………… Scott/HAL DELRICH
シェリー/サラ・ヨーク…………… Shelly/SARAH YORK

物語————死霊を永遠の眠りから醒ました者は、その罪を償わなければならない。

そこはテネシー州あたりの深い森の中だった。霧が立ち込める、薄気味の悪いムード。邪悪なナニモノかが、猛スピードで這いずり回っているのか!? 休暇をこの森の廃屋で楽しもうと、ルンルン気分の学生5人が4WDを駆っている。が突然、アッシュ(ブルース・キャンベル)が握っているハンドルの自由がきかなくなり、対向車のトラックと危うく激突しそうになった――。

今にも壊れそうな橋を渡り、一行は廃屋に到着した。ドアの上に隠してあった鍵をみつけ出し中に入ろうとすると、風に揺れていたはずの遊動円木がピタリと静止した。いったい何が――。

アッシュとリンダ(ベッツィー・ベイカー)、スコット(ハル・デルリック)とシェリー(サラ・ヨーク)はそれぞれカップルだが、シェリル(エレン・サントワイズ)は相手がいない。彼女が古い柱時計をスケッチしていると、午後10時30分のところで振り子が突然静止。驚くシェリルの体は金縛りにあったかのように硬直し、手だけが勝手に気味悪い顔のようなものを書き出す――。

次の夜、アルコールが入り盛り上がった只中に、床蓋がガタガタ鳴り始め地下室へ通じる蓋がはね開いた。動物でもいるのか!? スコットはフラッシュライトを手に降りてゆく。なかなか戻らぬスコットを心配して、アッシュも降りた。二人はそこで、ライフルやドクロの柄の短剣、テープレコーダーと一緒に死霊について記録された書を発見する。どうやら死霊を封じ込める研究をしていた学者の家だったようだ。その記録の中に、シェリルが書いてしまったあの顔の絵が――。

テープの中身は死霊の話だ。シェリルは気味悪がり止めようとするが、スコットが面白がって再生を続ける。やがて何やら忌わしい呪文が聞こえたかと思うと、庭に赤い閃光が起こった。彼らの無邪気な行為が知らず知らずの内に、地下に眠っていた『イヴィル・デッド』(死霊)を古代の邪悪な眠りから呼びさましてしまったのだ。彼らはまだ何も気づいてはいない――。

アッシュはリンダにペンダントをプレゼントする。スコットとシェリーはニャンニャンをしに…。中を覗かれている気配を感じたシェリルは庭へ出た。すると不意に大木が倒れ、細い枝がヒュルヒュルと這い延び彼女をレイプするではないか。手足に巻きつき首にからまり、服を引き裂くのだ。両足が開かれた股間にとどめの一撃が突き刺さった。

必死で廃屋に逃げ戻ったシェリルは、半狂乱で家に帰りたいと泣き叫ぶ。しかたなくアッシュが車を走らせたが、途中の橋が壊れており先に進めない。あたりは暗い。廃屋に戻るよりすべはなかった。月を黒い雲が不吉によぎる――。

ルンルンのはずだったバケーション。遂にシェリルは死霊にのり移られた。シェリルが、いやシェリルの肉体をした腐肉の形相のゾンビが仲間を襲う。鉛筆がくるぶしに突き立てられる。なんとか取り押さえ地下室への床下に監禁したと思った矢先、今度はふり向いたシェリーがゾ

ンビと化していた。爪でスコットの皮膚を裂き、自分の手首をガリガリと喰いちぎったのだ。ちぎり落とされた手首はドクロ柄の短剣を握り、ゾンビの背中をえぐる。血を吹きのかうつゾンビは口から白濁の汚液をまき散らし、息絶えたかに見えたが、再び立ち上がり襲撃開始。スコットは斧でゾンビに一撃をくらわし、全身をバラバラに叩き斬った。血だらけの床の上で、こまぎれの肉片がヒクヒクと震える。リンダは泣き叫び、床下に監禁したゾンビが恐しいうなりをあげる。男二人は肉片を庭に埋めた。シェリーは死んだ。が、死霊にのり移られないためには、肉体を切断する以外ないのだ。果たして誰が生き残れるのか――。

リンダの足に血のひび割れが走る。とうとう彼女にも死霊がのり移った。スコッティも外で襲われ傷ついていた。アッシュがライフルを構えると醜く変身したゾンビは元のリンダの顔に戻った。監禁中のゾンビも元のシェリルに戻り、ここから出してくれと哀願する。引き金を引くに引けないアッシュ。しかしそれもつかの間、再びゾンビがのり移ったリンダが暴れ始めた。乱闘の末ドクロ柄の短剣を刺すと、ゾンビはもんどりうって口から血を噴き出す。ゾンビの手足を拘束し、電動のこぎりのスイッチを入れるアッシュだが、ゾンビの首にかかったリンダに贈ったペンダントを目にするとどうしても切断出来ない。ゾンビは美しいリンダの顔と肉体に戻っていたので、ペンダントをはずし、庭に埋めた。その時、やにわに土の中から手が突き出て、アッシュの足首をつかんでかきむしった。血の海から、今埋めたゾンビが踊り出る。必死でふり回したスコップが、スパッとゾンビの首をとばした。首なしゾンビがアッシュを襲う。

なんとか仕留めて廃屋へ戻ると、監禁していたゾンビが鍵を壊し、アッシュを急襲する。そして、地下室の古い蓄音機と映写機がひとりてに回り始めた。配管からは血がしたり、コンセントから、壁から、電球から、建物じゅうから血が染み出してきた。鏡の面さえ血の水面だ。廃屋は血の池地獄と化したのである。

ドアを突き破り、なおもゾンビが襲い来る。傷を負っていたスコットもゾンビとなってアッシュに襲いかかる。親指での両眼つぶし。腹わたへの一撃は、赤ワイン樽の栓を抜いたように血が流れ出た。唯一人の生存者となって絶体絶命のアッシュは、地下で発見した死霊についての書を暖炉の火の中に投げ入れる。動きの止まったゾンビの体が、みるみる内におぞましく朽ち果てた。腐った肉塊を喰いちぎり、ドロドロヌルヌルしたものが部屋中にとび散った。死霊は滅びた、のであろうか――。

古い柱時計が再び時を刻みはじめ、血ぬられた惨劇の夜が明けた。一人生き残ったアッシュだったが、その背後に迫るナニモノかが――。

〈上映時間／1時間31分〉